

聖書：ローマ 12：1

説教題：霊的な礼拝

日時：2016年4月3日（朝拝）

ローマ人への手紙はこの12章1節からいわゆる「実践篇」に入ります。パウロの多くの手紙では、まず前半で教理が語られ、後半で実践の勧めが語られます。この順序は何を私たちに示しているのでしょうか。一つにはまず教理の優先性を私たちに教えてくれます。しばしばクリスチャンの中にも教えを好まない人がいます。結局はどう行動するかが大事であって、教理などには私は関心がないと。しかし正しい教えに基づかなければ、いつしか誤ったことに一生懸命になってしまうかもしれません。この手紙の10章でも、ユダヤ人は熱心だが、その熱心は知識に基づくものではないと言われました。このローマ書も16章の内、1～11章までが教理の部分だとすると、いかにこの教理が重要な位置を占めるかは自ずと明らかでしょう。しかしこの順序はもう一つのこととして教理には実践が続かなければならないことも示しています。ローマ書は全聖書の中でも最も素晴らしい教理が解説されている書ですが、1～11章を読んで知的に満足し、もう大事な部分は終わったかのように考えるのはならないのです。正しい教理は正しい実践に現れなくてはなりません。私たちはこれまで学んで来たことを思い返しつつ、パウロが語る言葉になお良く聞いて、キリスト教の福音が持つ力に生かされて行かなければならないのです。

まず今日、第一に注目したいのは、この勧めを語り出すにあたってパウロが「神のあわれみのゆえに」お願いしますと言っていることです。彼はここでクリスチャンを実践へと駆り立てる「動機」について語っています。それはこれまで見て来た「神のあわれみ」です。私たちは生まれながらに罪人です。本来すぐにさばかれて終わりとなって当然の者たちでした。しかし神はそんな私たちをあわれんで、私たちのために御子を遣わして下さいました。そして御子の人としての完全な地上の生涯と十字架・復活のみわざを通して、この方を信じる者を神は義と認めてくださることが言われました。そして私たちと和解して下さる。さらに私たちをご自身の子どもとしてくださる。また私たちを信仰の最初の時点で根本的に聖めてくださる同時に、生涯をかけて益々聖められる聖化の歩みを導いてくださる。そして最終的な栄光の状態へと導いてくださる。パウロはこれらの神の救いのみわざを一言で

「神のあわれみ」と呼んでいます。直前の 11 章 30～32 節でも、これまで見て来た神のみわざをまとめて「神のあわれみ」と言われました。そして 11 章最後の 33～36 節では神への頌栄の賛美が歌われました。

このような神のあわれみのみわざを見て来た私たちはどうすべきでしょうか。ただ一言、「神様、ありがとうございます」と言って、また元の生活に戻るべきでしょうか。決してそうではないでしょう。むしろ私たちは詩篇 116 篇 12 節のように言うべきでしょう。「主が、ことごとく私に良くしてくださったことについて、私は主に何をお返ししようか。」これは神のあわれみを心から感謝して受け止めた人の心に当然炸裂するであろう自然な応答でしょう。私たちを神への応答の生活、実践の歩みへと駆り立てるのはまさにこの神のあわれみなのです。

ですからもし私たちの生活が信じる以前とあまり変わっていないなら、どこに問題があるかと言えば、それはこの「神のあわれみのゆえに」という部分が良く受け止められていないところにあるのではないのでしょうか。自分は一体どれだけ神の大きなあわれみによって支えられ、今日このようにある者なのか、どれだけ神のあわれみに深く負っている者なのか、分かっていない。もしそのことが本当に分かったら、私たちはもはや自分のために生きている場合ではないでしょう。私の人生はただこの神にお返しし、この方にささげる人生でしかないと思うはずです。そしてそこに私たちの人生の目標、また生きがいは定まるのです。この神のあわれみこそ、私たちに力と情熱を注ぎ、御言葉に従う実践へと駆り立てる動機であり、原動力なのです。

ではこのように述べられた上で私たちに求められていることは何でしょうか。それは「あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい」ということです。ここで「ささげるように」と言われているのは私たちの「からだ」です。単に心をささげればいいのではない。気持ちをささげればいいのではない。求められているのは「からだ」です。どういうことでしょうか。それは私たちの心は、具体的にはこの目に見えるからだを通して現されるからです。キリスト教はもちろん心を大事にします。外側より内側が大事です。次の 2 節でもそのことを見ます。しかしそのあまり、心を主にささげれば、からだはどうしても良

いとは言いません。むしろパウロは「からだ」を問題にするのです。体はささげていませんが、心を私はささげています、と言うのは偽りなのです。この「からだ」の強調はこの手紙の中でもすでに見て来ました。6章12～13節：「ですから、あなたがたの死ぬべきからだを罪の支配に委ねて、その情欲に従ってはいけません。また、あなたがたの手足を不義の器として罪にささげてはいけません。むしろ、死者の中から生かされた者として、あなたがた自身とその手足を義の器として神にささげなさい。」あるいはIコリント6章19～20節：「あなたがたのからだは、あなたがたのうちに住まれる、神から受けた聖霊の宮であり、あなたがたは、もはや自分自身のものではないことを、知らないのですか。あなたがたは、代価を払って買い取られたのです。ですから自分のからだをもって、神の栄光を現しなさい。」

当時はギリシャ哲学の影響で、魂は尊ぶが、肉体は人間の低い部分として軽視する考えがありました。そのように霊を特別に強調して肉体を軽んじるころから、不道德な生活を許容する考えが助長されました。この霊肉人間論の考え方の影響は今日も強くあり、気をつけないと私たちもこのわなに陥りやすいと思います。口では神様と言い、祈りと賛美を熱心にささげて自分は霊的な人間であるかのように思いつつも、肉体はそれと違うことを行なっている。そうであってはならないということです。パウロはあなたがたの「からだ」をささげよと言っています。私たちはこの言葉に良く聞かなければならないのです。

さて「からだをささげよ」と言われていますが、ここでは神殿礼拝におけるささげもののイメージで語られています。神へのささげものとして、いくつかのことが要求されています。まず一つ目は「生きた供え物として」ということです。旧約時代のいけにえはささげる時にほふられました。しかし私たちは自分を殺すのではなく、生きた物としてささげます。ですからその生活をささげるのです。このいのちは6章11節で見たように、今や神に対して生きているいのちです。神との関係において生きているいのちです。そのいのちの内を歩む自分の生活を神にささげるのです。

2つ目に「聖い」供え物とあります。旧約では傷や欠陥のある動物はささげてはなりません。ですから私たちもささげものとなる自分の状態に無神経であつ

てはなりません。ここでの「聖さ」は、キリストにあって聖い者とされていることを前提にしつつ、私たちの道徳的に聖い生活のことを言っているのでしょう。ですから私たちは古い罪の生活に安住してはならない。また「わたしが聖であるから、あなたがたも聖でなければならない」と御言葉に言われているように、聖なる神ご自身を映し出す生活を求め、それをささげて行かなければなりません。

そうであるなら、それは3つ目にあるように「神に受け入れられるもの」となります。私たちは自分で考えてこれでいいただろうと思うものをささげるのではなく、神に受け入れられるものをささげなくてはなりません。それはどのようにして知ることができるかと言えば、みことばを通してと言うより他ないでしょう。神のみこころは聖書に啓示されています。ですから私たちは神に喜ばれることを知るために御言葉を注意深く学び、これに沿う形で自分のからだをささげて行くべきです。

最後に見たいことは、1節最後にある「それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です」という言葉です。「霊的な」という言葉は、しばしば神殿礼拝に起こりがちな単なる形式的・外面的な礼拝と対照的な意味で使われています。少し細かいことを言えば、この「霊的な」と訳されている言葉は珍しい言葉で、聖書では他に1か所にしか出て来ません。学者たちはこの言葉を当時の文献をもとに色々議論していますが、結論的に言えば、この言葉はギリシャ語のロゴスという言葉をもとにしたもので、「理性的な」とか「合理的な」という意味の言葉です。つまり霊的な礼拝とは、「良く考えてなされる」礼拝ということです。良く考えずにただ機械的になされる礼拝、形式的な礼拝、動作だけの礼拝ではありません。私たちの理性、心、知性、意志を総動員した、まさに心からの献身的な礼拝ということです。

そしてここで改めて教えられることは、そのようにして自分のからだをささげる生活が真の神礼拝であるということです。礼拝とは日曜日に教会堂に集まって1時間ばかりの時を過ごすことではないのです。礼拝とは私たちの全生活に関係することなのです。もちろん聖日に集まって、このように礼拝の時を持つのはふさわしいことですし、聖書で命じられていることです。しかしそれは聖書が語る礼拝の一つの側面にしか過ぎないのです。ですから私たちは礼拝を日曜日のこととだけ考えてはならないのです。一週間のすべてが礼拝の時なのです。

私たちは自分の全生活をそのような目で見ているのでしょうか。すべてが礼拝の時間という考えは私たちにとって重荷でしょうか。それは最初に見た「神のあわれみのゆえに」という言葉を私たちがどのように受け止めているかにかかっています。この神のあわれみを正しく受け止めているなら、私たちはいくら神に応答しても応答し尽くせないはずです。そんな私たちにとって、この12章1節は新しい光と大きな喜びを与えてくれる御言葉ではないでしょうか。私たちが神を礼拝するのは、日曜日この限られたわずかの時間だけではないのです。家にいる時も、学校にいる時も、職場にいる時も、街で買い物をしている時も、それは神を礼拝できる時間なのです。私たちの一週間の中に、神と関係なく歩む場所はありません。すべての場が神を礼拝することのできる場です。そしてそのすべての時間において、私たちは自分のからだをささげて神への礼拝行為に歩むように！とされているのです。

私たちはこの朝拝後、この場所を出て行きますが、この後も礼拝の時です。明日からも礼拝をささげる時です。これは何と素晴らしい考えでしょうか。私たちはここでも神に私たちの感謝を現わすことができます。神に喜んでいただく礼拝の生活ができます。そしてもし神に喜んでいただけるなら、神はそのことを喜んで、どんなに豊かな祝福へとさらに私たちを導き入れてくださることでしょう。このような神との交わりに歩むように私たちは召されています。このことを感謝して、私たちはこれからの自分の歩みを考えたいと思います。この聖日礼拝によって強められつつ、毎日、礼拝をささげる生活を通して、神への感謝をささげ、さらに豊かな神との交わりの祝福に生かされて行きたいと思います。「そういうわけですから、兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。」